

令和5年2月3日

世田谷区立喜多見小学校

校長 森田 賢様

世田谷区立喜多見小学

学校関係者評価委員会

委員長 坂本 雅則

## 令和4年度 学校関係者評価 報告書

コロナ禍の厳しい環境の続く中、子どもたちのために教育活動にご尽力をいただきました教職員の皆さんに、評価委員を代表して心から感謝申し上げます。

このたび行いました「令和4年度 学校関係者評価」について下記の通りご報告いたします。

### <学校関係者評価とは>

保護者、地域住民等の学校関係者などにより構成された学校関係者委員会が行う評価を言います。

目的・学校として組織的・継続的な改善を図ること。

- ・学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ・学校の教育の質の向上に努めること。

令和4年10月に児童、全児童保護者、及び地域の皆さんにご協力いただき実施された「学校関係者評価アンケート」の調査集計結果及び学校より提出いただいた「自己評価報告書」「重点目標の自己点検」、あわせて教員の方々からのヒアリングをもとにその分析・評価を行いました。

今年度よりアンケートはWEB上の回答となりました。

近年続く新型コロナウイルス感染症拡大による子どもたちの環境の変化、喜多見の地域性を踏まえた議論が行われました。

### <令和4年度 評価委員会総括>

#### 【家庭学習について】

保護者は家庭学習について、否定的な意見が多い。教員からも他の項目に比べて否定的に捉える人数が多い。高学年になると、親の目が行き届かないことも多く、下校後にさっと終わらせて外に遊びに行ってしまう姿が見られたり、タブレットでの宿題は、課題をやっているのかそれ以外のことをやっているのか把握できないことが多い。通塾の有無により、個々の放課後の過ごし方にも差があるが、宿題の量についてはもう少し検討してもよいのではないかという意見があった。

もともと喜多見小の地域は、昔から勉強をさせようという意識が低かった。今もそれが変わらない。それは逆に捉えれば、自然豊かな地域で、子どもたちがのびのびと元気に遊ぶということであり、喜多見の子の良いところでもある。

「家庭学習」をどう捉えるか。机に向かった勉強だけでなく、外遊び、虫取り、本、ピアノなどに取り組むことも、捉え方を変えれば、家庭での学習といえるだろう。問題視されやすいタブレットも、使い方によっては学びが溢れている。例えば、自然と触れ合うことを学びと考えた時に、「自然の中で遊んでいますか？」という項目があったら、喜多見の子はおそらく世田谷NO.1で評価されるだろう。というように、「家庭学習」を違う視点からみたら、また違う評価ができるのではないだろうか。

## 【読書について】

例年同様に、児童・保護者・教員ともに、本に対する否定的な回答が多い。

これは、世の中の状況から全国的に、文字から映像での情報収集に変化してきていることも影響している。そういった中でも、本校では、読み聞かせや司書さんの講話、週一回の読書タイムなど、いろいろ取り組みは行っている。また、児童に自ら進んで本に手を伸ばしてほしいという思いから、読書支援プロジェクトも盛んに活動している。今後も児童が本と触れ合う機会となるべく多くとれるよう継続していってほしい。

また子どもたちの興味を引き出せるように、読書を家庭での会話に取り上げたり、本の一節を授業で取り入れたり、本を読むだけでなく生活や学校に結びつけていけるような工夫を、学校と家庭でしていいただいいのではないだろうか。

## 【労作活動について】

本校では土を伸良しというテーマを上げて、労作プロジェクトと協力し、児童に草花土を触れ合う機会を取り入れているが、それを楽しいと感じている児童が少ない。

この原因として考えられるのが、今の時代の子は、インターネットで調べれば、成長を待たなくとも草木の成長の様子を確認することもできる世の中であり、じっと育てる事、待つということのできない子が多い。田植えや稻刈りなど、断片的な作業は楽しんで参加している様子が見られるが、一連の過程を理解できていないのではないだろうか。

また近年の不作なども影響して、収穫したものが児童の手に渡ることがなかなかできないため自分たちが育てている実感が得られず、楽しみや達成感につながらない。子どもたちが草木の成長過程をイメージできるような工夫や、収穫量が足りなかった場合もきちんとフォローしていくことが必要と考える。しかし、楽しく育てる体験はないが、喜多見の子は土は嫌いではない。外遊びをしているときは、土や砂をかぶっても気にせず遊んでいる。土に触れない子どもが増えている世の中で、自然の中で土まみれになって遊べるのは、喜多見の子たちの良いところであると感じられる。

## 【あいさつ・交通ルールについて】

児童は交通ルールも守っている意識があるが、安全という視点では地域の方から否定的な回答が多かった。実際、登下校や放課後の自転車の乗り方などで、地域の方々から注意の連絡が来ることも多い。また同様に、児童はあいさつができると肯定的だが、周りの大人からみると、まだ否定的な声が多い。交通ルールやマナー、相手に伝わるあいさつという点での指導を、引き続き学校や家庭でしていく必要があると考える。

## 《まとめ》

近年続く制限ある生活の中でも、子どもたちは充実した学校生活を送ることができていていることがアンケート全体から読み取れ、この安心した環境を与え続けてくださる教職員の皆様へ改めて感謝を申し上げたい。

時代の流れとともに、子どもたちを取り巻く環境も変わる中で、大人が弊害と考えるものでも、子どもにとっては学びとなることが多い。喜多見の子どもの良さを伸ばし、子どもの可能性を広げていくためにも、学校・保護者・地域の方々も、時代に合わせて視点で見守っていく必要がある。

学校評価アンケートにおいても、項目の捉え方に親と子のズレが生じている部分も多い。

意図した調査ができるよう、今後も評価員会として活発な意見交換をし、喜多見小独自の項目について具体化できるよう検討していきたい。

喜多見小学校は昨年度50周年を迎える、喜多見の伝統を継承しながら、また次の未来へ向けて歩み始めた。

今後とも、喜多見らしさを大切にした、児童のニーズに応じた教育活動を期待するとともに、評価委員会としても、児童にとってのより良い環境づくりをサポートしていきたい。